

研究拠点形成事業 平成25年度 実施計画書

A. 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関:	京都大学野生動物研究センター
(マレーシア)拠点機関:	マレーシア・サバ大学
(ブラジル)拠点機関:	国立アマゾン研究所
(インド)拠点機関:	インド科学大学

2. 研究交流課題名

(和文): 大型動物研究を軸とする熱帯生物多様性保全研究

(交流分野: 生物学、生態・環境、基礎生物学)

(英文): Conservation research of tropical biodiversity centering on large animal studies

(交流分野: Biology, ecology, environment, Basic biology)

研究交流課題に係るホームページ: <http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/core-to-core/>

3. 採用期間

平成 24 年 4 月 1 日 ~ 平成 29 年 3 月 31 日

(2 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関: 京都大学野生動物研究センター

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名): 野生動物研究センター・センター長、幸島司郎

コーディネーター (所属部局・職・氏名): 野生動物研究センター・センター長、幸島司郎

協力機関: 京都大学霊長類研究所

事務組織: 京都大学研究国際部研究推進課、野生動物研究センター事務室

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名: マレーシア (Malaysia)

拠点機関: (英文) University Malaysia Sabah

(和文) マレーシア・サバ大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名): (英文) Institute for Tropical Biology and Conservation, Director and Associate professor, Abdul Hamid AHMAD

協力機関：(英文) Sabah Foundation

(和文) ヤヤサンサバ財団

協力機関：(英文) Malaysia Science University

(和文) マレーシア科学大学

協力機関：(英文) Plau Banding Foundation

(和文) プラウバンディング財団

協力機関：(英文) Orang Utan Island Foundation

(和文) オランウータン島財団

経費負担区分 (A型) : type 2

(2) 国名：ブラジル (Brazil)

拠点機関：(英文) National Institute for Amazonian Research

(和文) 国立アマゾン研究所

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Laboratory for Aquatic Mammal Study,

Professor, Vera Maria Ferreira DA SILVA

協力機関：(英文) ありません

(和文)

経費負担区分 (A型) : type 2

(3) 国名：インド

拠点機関：(英文) Indian Institute of Science

(和文) インド科学大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Center for Ecological Sciences,

Chairman and Professor, Raman SUKUMAR

協力機関：(英文) ありません

(和文)

経費負担区分 (A型) : type 2

5. 全期間を通じた研究交流目標

ボルネオやアマゾンの熱帯雨林など、熱帯生物多様性の重要なホットスポットを有するマレーシア、ブラジル、インドの3国は、いずれも経済的・歴史的に日本と関わりが深いばかりでなく、近年の著しい経済発展と開発のため、生物多様性の保全が緊急の課題となっている点、自力での多様性保全の機運が高まっている点で共通している。熱帯生態系の多様性保全には、ゾウやトラ、オランウータン、イルカ、ワシなど、大型動物の研究と保全が重要な意味を持つ。これらの多くは、その種を守る事が他の多くの生物や環境を守る事

につながるアンブレラ種であると同時に、森林伐採などに代わって地域経済に貢献可能なエコツーリズムで、その生態系のシンボルとして重要となるフラッグシップ種だからである。しかし熱帯諸国では、まだ研究者が少なく、熱帯諸国間の研究者交流も希薄である。京都大学野生動物研究センターと霊長類研究所は、これまでこれら3国でオランウータンやイルカなど多様な野生動物の行動・生態研究で大きな国際的成果をあげてきた。本計画は、これまでの交流実績をもとに、日本と相手国研究者、特に若手研究者や大学院生が対等な関係で、1) 日本が得意とする先端研究技術を駆使した大型動物の行動・生態・保全に関する共同研究、2) 野生動物の研究・教育・保全はもちろん、COP10名古屋プロトコルの実現に向けたエコツーリズムによる地元の経済活性化と環境保全にも貢献できる自然生息地に直結した「理想の動物園・水族館」の整備。3) 日本が仲立ちとなった熱帯諸国間の研究者交流と共同研究を推進することによって、熱帯生物多様性保全に関する国際研究協力ネットワークを構築することを目標としている。成長著しい生物資源大国であるこれら3国と日本が対等な関係で研究交流することで、生物多様性保全に関するユニークな国際貢献を果たしたい。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

マレーシアでは、マレーシア・サバ大学と連携し、ボルネオ島では、ダナムバレー自然保護区などで野生オランウータン、バンテン(野生ウシ)、ジャコウネコ類、ヤマアラシ類、カワウソ類など、マレー半島では、マレーシア科学大学、プラウバンディング財団、オランウータン島財団と連携して、ベラム・テメンゴール森林保護区などで、飼育オランウータンの野生復帰事業への協力や、野生バク、コウモリ類、イルカ類などに関する共同研究を行った。ブラジルでは、国立アマゾン研究所と連携して、アマゾンカワイルカやアマゾンマナティー、コビトイルカなど、アマゾン川の水生哺乳類を初めとする各種哺乳類についての共同研究をおこなった。インドでは、インド科学大学と連携し、ゾウや絶滅危惧イヌ科動物であるドール等に関する共同研究を行なった。

日本では、相手国若手研究者6名(各国から2名ずつ)を迎え入れて、野生動物研究センターが霊長類研究所の協力を得て、京都大学において第一回目の国際セミナーをおこなった。この国際セミナーには他経費による海外からの参加者5名も含めて計79名が参加し、これまでの互いの研究内容、日本での共同研究と研修の成果に関する情報を共有するとともに、共同研究の具体的な進め方などを討議した。また、ゲストスピーカーとして招いたバイオリギングや音声分析、ゲノム分析など先進的研究手法による優れた研究を行っている研究者による講演と討論、その他多くの国内外研究者と学生参加者の発表・討論により、今後の共同研究に有用な情報交換を行なうことができた。この国際セミナーとあわせて、研究技術向上を目指した日本での研修と共同研究を、野生動物研究センターや霊長類研究所の施設、世界自然遺産であり野生動物研究センターが観察施設を持つ屋久島、および連携動物園・水族館の施設などで行った。屋久島での研修および共同研究は、京都大

学の大学院生12名を中心とする日本の若手研究者と合同で行ったもので、フィールドワークだけでなく次世代シーケンサーを使ったゲノム解析など、先端的な野生動物の研究法を日本と相手国の若手研究者が協力して開発し習得しながら、屋久島の貴重な野生動物研究を進め、その保全に貢献することを目的としている。この研修と共同研究、国際セミナーは全て英語で行われ、相手国での共同研究や研究レベルの向上に役立つばかりでなく、日本の若手研究者の研究レベル向上と国際化、グローバル人材の育成、世界自然遺産である屋久島をモデルとした野生動物保全と地域社会の持続的発展を両立させる方法の策定にも貢献できると考え、今後も継続・発展させる予定である。

また、連携先相手国のもちまわりで毎年1回開催するものとして、野生動物保全研究に関する第一回目の国際ワークショップをブラジルのマナウスにある国立アマゾン研究所において開催した。参加4国の研究者が互いの研究内容や共同研究の現状に関する情報を共有することで、今後の共同研究の具体的な進め方などを討議した。その他多くのブラジル側研究者と学生を含む参加者（計51名）の発表・討論により、今後の共同研究に有用な情報交換を行った。多くのブラジル側研究者や学生の参加は、新たな共同研究を準備し、将来に向けて本事業による熱帯生物多様性保全に関する国際共同研究ネットワークを発展させる契機となると考えられる。

7. 平成25年度研究交流目標

各相手国において、前年度までの研究成果をふまえて各共同研究を継続し、さらに発展させるとともに、若手研究者による新たな共同研究を始動させる。マレーシアでは、マレーシア・サバ大学と連携し、ボルネオ島では、ダナムバレー自然保護区などで野生オランウータン、バンテン（野生ウシ）、ジャコウネコ類、ヤマアラシ類、カワウソ類など、マレー半島では、マレーシア科学大学、プラウバンディング財団、オランウータン島財団と連携して、ベラム・テメンゴール森林保護区などで、飼育オランウータンの野生復帰事業への協力や、野生バク、コウモリ類、イルカ類などに関する共同研究を継続・発展させる。ブラジルでは、国立アマゾン研究所と連携して、アマゾンカワイルカやアマゾンマナティー、コビトイルカなど、アマゾン川の水生哺乳類を初めとする各種哺乳類についての共同研究を継続・発展させる。インドでは、インド科学大学と連携し、ゾウや絶滅危惧イヌ科動物であるドール等に関する共同研究を継続・発展させる。前年度までの研究交流の成果にもとづいて、新たな対象動物に関する共同研究も開始する予定である。

日本では、前年度に引き続き相手国若手研究者6名（各国から2名ずつ）を迎え入れて、京都大学において第二回目の国際セミナーをおこなうとともに、研究技術向上を目指した研修と共同研究を、野生動物研究センターや霊長類研究所の施設、屋久島、および連携動物園・水族館の施設などで行なう。本年度の研修および共同研究では、次世代シーケンサーを使ったゲノム解析やLC/MAS・MASによる高度化学解析など、前年度よりレベルアップした先端的な野生動物研究法を日本と相手国の若手研究者が協力して開発・習得する。今

年度からは、この国際セミナーと屋久島での研修・共同研究を、京都大学の大学院の正式な教育カリキュラムの一部として、大学院教育に取り入れる予定である。同様に、相手国の大学についてもそれと対応したシステムを構築したい。

また、連携先相手国のもちまわりで毎年 1 回開催するものとして、野生動物保全研究に関する第二回目の国際ワークショップをインドのバンガロールにあるインド科学大学において開催する。多くのインド側大学院生や若手研究者の参加によって、新たな共同研究を準備し、将来に向けて本事業による熱帯生物多様性保全に関する国際共同研究ネットワークを発展させる契機としたい。

こうした具体的な努力をもとにした研究交流目標について述べる。野生動物研究センターは、野生動物を研究した大学院卒業生や、若手研究者が将来活躍できる場となることを想定して動物園・水族館、野生生物保全施設と連携を深めている。おそらく近未来に、内外の動物園・水族館や野生生物保全施設職員など、野生生物保全関連職種に就くには、マレーシア、ブラジル、インドのような海外での実地の研修や研究経験が、評価さらには義務付けられることになるだろう。そうした職業機会の増大も視野に入れて研究協力体制を構築することが肝要だと展望している。すなわち、本事業によって育成された若手研究者が、動物園・水族館を含む野生動物保全関連職種に就くことによって、本事業によって構築した研究協力体制を維持・発展できると期待している。日本の大学院生ならびに若手研究者にとっては、マレーシア、ブラジル、インドの対応機関と各国の調査地が、野外実践経験の場として有効に機能するだろう。さらにはそれが日本と相手国の若手研究者の育成にもつながる。相手国側の若手研究者の視点でいえば、日本に派遣されて、自国では学べない多様な研究に触れ、さらに自国で野外研究の実践を積むことができる。彼らは将来、京都大学の研究協力者あるいは卒業生、学位取得者として、日本との学術交流の礎になると期待される。

8. 平成25年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成24年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) マレーシアにおける熱帯生物多様性保全 (英文) Conservation of tropical biodiversity in Malaysia				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授 (英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Abdul Hamid AHMAD, Institute for Tropical Biology and Conservation, Director and Associate professor				
参加者数	日本側参加者数	12名			
	(マレーシア)側参加者数	9名			
	()側参加者数	名			
25年度の 研究交流活動 計画	<p>ボルネオと、マレー半島で、前年度までの研究成果をふまえて各共同研究を継続し、さらに発展させる。</p> <p>ボルネオ島：対応するのは拠点機関のマレーシア・サバ大学である。ハミド、ヘンリーの両教員が対応する。ボルネオ熱帯生態系の野生動物保全研究をおこなう。具体的には、バンテン（野生ウシ）、センザンコウ、オランウータン、ヤマアラシ、ジャコウネコ、カワウソ、が研究対象である。主要な研究メンバーは、松林尚志（東京農業大学准教授、京大WRC）、久世濃子研究員、金森朝子研究員、に加えて、大学院生の松川あおい、中林雅。さらにキナバタンガン流域で、松田一希、ダナムバレイ・フィールドセンターで半谷吾郎である。</p> <p>マレー半島：マレー半島熱帯林の野生動物保全研究をおこなう。オランウータン、マレーバク、ゾウ、コウモリなど。林美里、黒鳥英俊、田和優子、ベルコビッチ、ヒルが主要な研究者である。</p>				

<p>25年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>ボルネオ島では、バンテン（野生ウシ）、センザンコウ、オランウータン、ヤマアラシ、ジャコウネコ、カワウソの研究が進み、こうした大型動物がアンブレラ種であることから、これらの研究を軸とした熱帯生物多様性研究とその保全計画について一定の展望が開ける。</p> <p>マレー半島では、オランウータン、マレーバク、ゾウ、コウモリの研究が進み、ここでも熱帯生物多様性研究が進む。とくにオランウータンはフラグシップ種である。ボルネオのダナムバレイで野生オランウータンの研究が進展し、一方のマレー半島でその野生復帰プログラムがさらに進むと期待できる。</p>
--	--

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 24 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) ブラジルにおける熱帯生物多様性保全				
	(英文) Conservation of tropical biodiversity in Brazil				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授				
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Vera Maria Ferreira DA SILVA, National Institute for Amazonian Research, Professor				
参加者数	日本側参加者数	10 名			
	(ブラジル) 側参加者数	6 名			
	() 側参加者数	名			
25年度の 研究交流活動 計画	ブラジルでは、国立アマゾン研究所のダジルバ教授を主たる対応者として、 前年度までの研究成果をふまえて、アマゾンの野生動物保全に関する各共同 研究、特にアンブレラ種であるアマゾンカワイルカ、コビトイルカ、マナテ ィーに関する研究を継続し、さらに発展させる。主要な日本人研究者は、森 阪匡通特定助教と、研究員の佐々木友紀子、菊池夢美、池田威秀、大学院生 の吉田弥生である。				
25年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	アマゾン熱帯生態系の野生動物保全において重要なアンブレラ種である、ア マゾンカワイルカ、コビトイルカ、マナティーなどの水棲哺乳類や、霊長類 のなかでキャプチン（オマキザル類）を対象にした研究について野外研究が 進展すると期待される。				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 24 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) インドにおける熱帯生物多様性保全				
	(英文) Conservation of tropical biodiversity in India				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授				
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Raman SUKUMAR, Indian Institute of Science, Professor				
参加者数	日本側参加者数	10 名			
	(インド) 側参加者数	5 名			
	() 側参加者数	名			
25年度の 研究交流活動 計画	インドでは、インド科学大学の生態科学センターのスクマール・ラマン教授を主要な対応者として、共同研究をおこなう。これによって、インドにおける熱帯生態系と野生動物保全研究をおこなう。具体的には、ドールと、オオカミと、アジアゾウを研究対象にする。野生動物研究センターの大学院生である澤栗秀太がドールの研究をおこない、植田彩容子がドールとオオカミの研究をおこない、安井早紀がアジアゾウの研究をおこなう。これにはインド科学大学の強力な支援が得られる。スクマール・ラマン教授は、野生生物保全において国際的にもたいへん高名な研究者であり、共同研究についてたいへん力強い支援をいただいている。また、同教授の協力を得てインド科学大学で第二回目の国際ワークショップを行う。				
25年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	インドにおける熱帯生態系と野生動物保全の研究がさらに進み、対象動物や調査地も広がるのが期待できる。今年度にドールとオオカミとゾウの研究など若手研究者による野外研究がさらに進展すれば、今後、インドの他の地域や、他の大型動物に焦点をあてた研究についても展望が開けると期待できる。				

8-2 セミナー

—実施するセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「熱帯生物多様性研究国際セミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “International Seminar on tropical biodiversity”
開催期間	平成 25 年 5 月 24 日 ~ 平成 25 年 6 月 1 1 日 (19 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、京都、京都大学野生動物研究センター (英文) Japan, Kyoto, WRC, Kyoto University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授 (英文) Shiro KOHSHIMA・Wildlife Research Center of Kyoto University・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	25 / 148	
	B.	55	
マレーシア 〈人／人日〉	A.	2 / 38	
	B.	0	
ブラジル 〈人／人日〉	A.	2 / 38	
	B.	0	
インド 〈人／人日〉	A.	2 / 38	
	B.	0	
合計 〈人／人日〉	A.	31 / 262	
	B.	55	

参加者数

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
- B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>共同研究の一環として、生物多様性研究のための国際セミナーを日本でおこなう。実習形式のセミナーである。研究技術向上を目指した日本での研修と共同研究のために招聘した相手国若手研究者と日本の若手研究者が共同して、屋久島や各相手国でのフィールドワークで集めたサンプルについて、ゲノム解析、バイオロギングデータ解析、音響・画像解析などを行った成果発表を行うとともに、ゲノム分析など先進的研究手法による優れた研究を行っている研究者による招待講演と討論によって、共同研究のレベルアップと、相手国と日本の若手研究者の育成をはかる。相手国に派遣された学生や若手研究者には帰国後、中心になって来日者の世話や日本での国際セミナーの世話をしてもらい相互交流をさらに緊密化する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>日本で開催することで、相手国研究者に日本の研究の進展のようすを理解する機会を与える。共同研究のフィールドワークで集めてきたサンプルについて、相手国と日本の若手研究者が共同してゲノム解析、バイオロギングデータ解析、音響・画像解析などの先進的研究手法を開発・習熟することによって、共同研究のレベルアップとグローバル人材の育成が期待できる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>全体の総括をする代表者の幸島司郎をリーダーとして、若手研究者で運営組織をつくる。すなわち、各国研究者（2名ずつ、計6名）と、それに対応する日本側若手研究者（各国2名ずつ、計6名）が中心になって、それぞれの国情にあわせて協力した運営組織を作る。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 国内旅費 1,900,000 円 謝金 100,000 円 備品・消耗品費 2,000,000 円、その他 145,000 円 謝金に係る消費税 5,000 円 計 4,150,000 円</p>
	<p>(マレーシア・ブラジル・インド) 側</p>	<p>内容 外国旅費</p>

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「熱帯生物多様性国際ワークショップ」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “International workshop on tropical biodiversity “
開催期間	平成 25 年 9 月 12 日 ~ 平成 25 年 9 月 16 日 (5 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) インド、バンガロール、インド科学大学
	(英文) India, Bangarole, Indian Institute of Science
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎、京都大学野生動物研究センター、教授
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto university, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Center for Ecological Sciences, Professor, Raman SUKUMAR

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (インド)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	20/ 100	
	0	
マレーシア 〈人／人日〉	2/ 10	
	0	
ブラジル 〈人／人日〉	2/ 10	
	0	
インド 〈人／人日〉	5/ 25	
	20	
合計 〈人／人日〉	29/ 145	
	20	

参加者数

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>共同研究の一環として、生物多様性研究のための国際ワークショップをインドでおこなう。各相手国（マレーシア、ブラジル、インド）と日本の研究者が一堂に会する。とくにインドの野生動物調査の現場でそれを行うことで、相互交流をさらに緊密化する。現地に整備する生息地型の動物観察施設というアイデアを、実際に現場で体験することで具体化する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>日本から研究者がインドに出向くだけでなく、マレーシアやインドからも参加することで、熱帯生物多様性研究のための4か国体制がより強固なものになると期待される。とくに、インドではゾウやトラといった熱帯生物多様性のフラグシップ種の保全構想が動いており、そうした新しい活動の現場を、ブラジルやマレーシアからの参加者にも体験してもらうことができる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>全体の総括をする代表者の幸島司郎をリーダーとして、また現地の受け入れ責任者であるスクマール教授を共同責任者として、熱帯生物多様性国際ワークショップ運営委員会を組織する。具体的には、日本とインドで若手研究者（各国3名ずつ、計6名）が中心になっておこなう。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 国内旅費 100,000 円、外国旅費 2,400,000 円 外国旅費に係る消費税 120,000 円 計 2,620,000 円</p>
	<p>(マレーシア・ブラジル) 側</p>	<p>内容 外国旅費</p>
	<p>(インド) 側</p>	<p>内容 会議費・国内旅費</p>

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

平成 25 年度は実施しない。

9. 平成 25 年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	マレーシア 〈人／人日〉	ブラジル 〈人／人日〉	インド 〈人／人日〉	合計 〈人／人日〉
日本 〈人／人日〉		12/351 (14/575)	10/150 (10/120)	20/140 (1/86)	42/641 (25/781)
マレーシア 〈人／人日〉	2/66 (1/6)		0/0 (0/0)	0/0 (2/10)	2/66 (3/16)
ブラジル 〈人／人日〉	2/66 (2/8)	0/0 (0/0)		0/0 (2/10)	2/66 (4/18)
インド 〈人／人日〉	2/66 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		2/66 (0/0)
合計 〈人／人日〉	6/198 (3/14)	12/351 (14/575)	10/150 (10/120)	20/140 (5/106)	48/839 (32/815)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。（なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。）

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。（合計欄は（ ）をのぞいた人数・人日数としてください。）

9-2 国内での交流計画

25 / 157 〈人／人日〉

10. 平成25年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	5,000,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	6,000,000	
	謝金	100,000	
	備品・消耗品購入費	3,950,000	
	その他の経費	645,000	
	外国旅費・謝金等に係る消費税	305,000	
	計	16,000,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,600,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		17,600,000	